

2005 Chamonix Mont-Blanc

- <期 間> 2005年7月10日～7月19日
<山域と目的> モン・ブラン(4, 807m)登頂及びシャモニ周辺の山々のクライミングとハイキング
<参加者> 小倉 龍彦 小倉 恵 小嶋 紀子 箕浦 浩三
前川 秀夫 前川 加代子(会外) 原 和子(会外)

PROLOGUE

2004年の春、思うように山に足を向けることが出来ず悶々と過していたある時、はたと気がつく。来年2005年はツェルマツトから5年目の年。自分の中では5年後にはまたどこかに行こうと秘かに思っていたが、準備はおろか目的地さえ決めかねていた。忘れ物を残してきたままのツェルマツトにもちよいと未練が残るところであったが、今回は<First time> のシャモニにでも行くべか…。てな訳で行き先はいとも簡単に決めてしまう。

さていざどこに登ろうかいなとあれこれ悩んだが、当初はグランドジョラスのノーマルルートを設定し、1人コツリとアイゼン岩トレなんぞに励んでおった。そんな妙な動きを察知したのか、前回メンバーの1人から「行くんだったら声かけてちょ!!」と間接的に耳に入ってくる。最初からそのつもりではいたが前回メンバーの全員に声をかけてみる。結果、腰痛の黒瀧氏、仕事で休みが取れないクマちゃんと箕浦留美子さんが今回は見送りとなり、小嶋さんの友人原さん(和歌山在住)の初参加で、上記7名のパーティーとなった。小倉(龍)、小嶋、箕浦、前川(秀)4名<Aパーティー>がモン・ブラン登頂。小倉(恵)、前川(加)、原3名<Bパーティー>が、シャモニ周辺のハイキングを主とした内容で計画を進める。航空券、宿泊、ガイド予約はアルパインツアーに依頼。今回もなるべく割安でという事でキャセイパシフィックを利用。香港～ヒースロー～ジュネーブという面倒な乗り継ぎを強いられるが、900ユーロのガイド料(5日間)を考えれば当然の選択か。宿泊はあいにく自炊可能な格安レジデンスが見つからず、最終的に朝食付の比較のお値打ちなホテル(メルキユール)に落ち着いた。

自主トレと合同トレ(御岳、白馬、木曾駒、富士山)を何とか無難にこなし、ようやく出発の日を迎える運びとなった。ただひとつの不安は、「無事に予定通りシャモニに行き着けることが出来るか...。」であった。

シャモニへ

7月10日(日)

14時30分現地(中部国際空港)集合。小嶋、前川、原は自家用車。小倉、箕浦は電車を利用。搭乗手続きを済ませ、レンタル携帯電話の受け取りと、ユーロへの両替をする。初めての“セントレア”にちょっと遠足気分ですわついていると、何故か「お風呂セット」持参の佐々木さんと遭遇。ついでのお見送りをして頂いた。

17時15分 CX531にて名古屋(中部)発。台北経由(トランジット)で香港に向う。22時20分(現地時間)香港着。着陸直前に見下ろした香港の夜景は何度見てもファンタスティック。

地下電車を利用し出発ターミナルに向かう。23時55分、CX251にて香港発。約13時間の長くてキツイ空の旅が始まる。(機中泊)

7月11日(月)

5時45分、ヒースロー空港(ロンドン)着。最初の難関「ひーすろー」である。アルパインツアーのスタッフからも「あそこは広くて分かりにくい」と何度かおどされていたが、実際広い。「Flight Connection」の案内板を頼りにひたすら歩く。それから専用バスにてターミナル4へ。手荷物検査と搭乗手続き後ようやく「British Airways」の出発ゲートにたどり着く。一週間ほど前に起きたロンドン市内のテロの影響で、厳戒態勢が敷かれているものと想像していたが、武装警官がいるわけでもなく極めて普通だった。(一安心)

8時30分 BA726にてヒースロー発。天気は良好。眼下に広がるロンドン郊外の田園地帯を抜けると、間もなく機体はドーバー海峡上空を通過する。ここを泳いで渡ると8,000m峰に立つのでは、どっちが難しいかなどとたわいのないことを考えているうち、やがてフランスと思われる対岸にさしかかる。この国も緑豊かな大地で、全部が葡萄畑に見えてくる。そして凱旋門を中心に放射状に広がる幾何学模様のパリ上空を過ぎ、起伏のある山岳風景が広がってくると、機体は徐々に高度を下げ、11時10分 ジュネーブ空港に到着する。入国審査に向かう通路を歩きながら、シャモニが近くなってきたことをヒシヒシと実感する。しかしこの直後、重大な問題が勃発してしまう。

「ミノさんのスーツケースが出てこない!!」 ターンテーブルも止まってしまった...。とりあえず小倉、箕浦にて、BAのオフィスに向かい、スタッフに事情を伝える。ジュネーブ空港に着いていないのは確認できたが、どの空港に在るかは今のところ分からないと言う。荷物の特徴や色などを伝え、発見後直ちに宿泊先に届けられるよう手続きをすませ、さしあたりの洗面具セットを受け取る。波乱の幕開けとなったが、税関を抜けようやく空港玄関の表に出る。陽射しが明るい。思いっきりヨーロッパの外の空気を吸ってみる。(ちょっと冷たい)

のんびりしている時間もあまりなくなったので即タクシー2台に分乗し、一路シャモニに向かう。ジュネーブは中世ヨーロッパの伝統的な建物が点在し、明るくてきれいな街並みが続く。スイスからフランスへの国境通過は意外と簡単で、タクシーの運ちゃんが数分車を離れて手続きが終ってしまう。

街を抜け一時間ほど走ると、右手前方に白い峰々が姿を見せ始める。そして目の前に巨大な氷河の末端が迫ってくると間もなくタクシーはシャモニの街中に入っていく。

このタクシーの運ちゃん、乗る前に宿泊ホテルの名前を告げると「OK, OK まかしとき!!」てなことを言っていたが、実際、ああだこうだ言い訳しながら街中をグルグル廻り始めホテルを探している。マアここまで来れば慌てる事もなく、華やかなメインストリートを車中から見物しているうちホテル前に到着。

シャモニ鉄道駅のすぐ脇の<Good Location> で、部屋のベランダに色とりどりの花が飾られたオシャレで“Woody”なホテルである。荷物を降ろしフロントに向かうと、なんと日本人の女性スタッフがいるではないか。“超 Lucky”。この先、いろんな情報や、手配などでお世話になる。



ホテル・メルキュール



ホテルから望むモン・ブラン

各自の部屋で荷物の整理後、ガイド組合に向かう。レストランやショップの並ぶ賑やかなミッシェル・クロ通りを抜けると大きな教会の広場に出る。その右側がガイド組合のオフィスだ。実は今日ここに来る予定の日にはなっていなかったのが、最初女性スタッフから不思議そうな顔をされたが、組合で作成した日程表のコピーを見せるとようやく納得してくれ、しばらく待ってガイド料残金(600ユーロ)の支払いをカードで済ませる。この後、インフォメーションセンターやバルマ広場の銅像などを見物し、近くのオープンレストランで少し早めのディナータイムにする。チキンとパスタを同じソースで絡ませた“本日のお勧めランチ”は決して「旨い!!」とは言えなかったが、無事シャモニ到着の乾杯ビールは限りなく旨かった。



シャモニの中心を流れるアルヴ川



ソシュールとバルマの像

ブレヴァン展望台[le Brevent]

7月12日(火)

今日はA、B両パーティー唯一の合同行動日。ブレヴァン展望台からプランプラへののんびりハイキング。ホテルの朝食を済ませた後、テレキャビンの乗り場に向かう。Bパーティーはここで6日間有効の割引チケット(MULTIPASS)を購入。テレキャabinは一気に急斜面を登りつめプランプラ駅に着く。ここからロープウェイに乗り換えブレヴァンへ。この展望台からの眺めはすばらしく、モン・ブランが間近に迫り、エギーユ・デュ・ミディやボソン氷河の全体も一望に見渡せる。シャモニの谷と反対側の景色もなかなかで、グランドキャニオンぽい岩山が連なる。展望台から広い砂利道をしばらく下ってゆくと、大きな道標のあるケルンが見えてくる。少し先のクライミングルートのある岩壁の下部でちよっぴり戯れた後、道標を左に巻くルートに向かう。ハイキングコースとはいえ結構急なガレ場が続く、しばらく行くと岩に取り付けられた鉄ハシゴを通過中のフランス人の先行パーティーに追いついてしまう。ガイドと思われる人物から細かい指示を受けながら、みんな慎重に下っている。このガイドさん、まあまあ若くて“Beauty”な女性で、タンクトップ&Shortパンツ姿に思わず(^^)(^^)。

平坦な長いガレ場を歩き続けると、辺りはいつの間にか色鮮やかな花々で囲まれ、しばし撮影タイム。一眼レフ持参の原さんもバッシ、バッシ撮り始める。そんな時“オゴジョ”みたいなものにも遭遇する。

すれ違うパーティーも多くなり、「ボジュール」の声が飛び交う。前川(加)さんはスキンシップも交え国際交流にいそしんでいる。

ここからしばらく登りになり、稜線に出ると再びモン・ブランが姿を現す。トラヴァース気味に雪渓を踏みながら下っていき「ブレヴァンのコル」を通過。はるか下方に見えるプランプラのテレキャビン乗り場を目指し、長い長いジグザグの急斜面を下って行く。斜面一帯はアルペンローゼが咲き乱れ、紺碧の空にはアクロバテ

ィックなパラグライダーが風と遊んでいる。

ようやく下りきり、パラグライダーのスタート地点を横目に見ながら、乗り場少し手前のレストランに入ってランチタイム。明るいオープンデッキで、モン・ブランやシャモニ針峰群を眺めながら、ビール片手にピッツアや手作りパンを楽しむ。

目の前に敷かれているペーパーのテーブルクロスが、シャモニの山々やマーモットのイラストが描かれていて結構カワイイので、原さん早速クルクル手で丸めてザックにしまおうとすると、いかにも陽気なウェイトレスのお姉さんに「あとで新品あげっから、それはちゃんとテーブルに敷いときな!!」てな事言われてしまう。

テレキャビンでシャモニに降り、夕食までにはまだ時間があるので一旦ホテルに戻る。カウンターに例の日本人スタッフがいたので、未だに到着していない“ミノさんの手荷物”について所在の確認をお願いします。どうも既に運送業者の手に渡り、ホテルに向っているらしいという。しかし何時到着するとも分からない荷物ミノさんは不安の色が隠せない。まさにそんな時であった。ホテルの玄関のガラス越しに、運送屋っぽい車が止まり、若い運チャンが荷台から見覚えのあるグリーンのスーツケースをヨッコラショと降ろしているのが見えるではないか。二人で足早にかけ寄り、スーツケースを愛しく撫でながら運チャンに向かって「メルスイー!! メルスイー!!」を連発。思いがけない歓迎ぶりに運チャンは呆気にとられながらも誇らしげに微笑んでいた。

これで明日から始まるトレーニングに必要な装備もレンタルする必要がなくなり一件落着。(最悪の場合を想定し、前日、レンタルショップで装備の料金表を入手していた。)

今日は、昨日下午調べしておいた日本料理レストラン“さつき”で夕食をとることになった。

「刺身」「寿司」「天婦羅」「麺類」「丼物」etc 一通りの和食メニューが揃っているが、みんなが注文したものは、「ご飯」「味噌汁」「冷奴」「酢の物」「お新香」と極めて慎ましやかなものであった。しかし自分たちが“日本人”であることを素直に実感しつつ、ほんの数日間味わえなかった“和の味”にこの上ない幸せを感じるひとときであった。

夕食後、街をぶらつき近くのマーケットで明日の行動食やミネラルウォーター等を仕入れてホテルに戻る。



ブレヴァン展望台(後方はモン・ブラン)



鉄ハシゴを下る

メール・ドウ・グラス[Mer de Glace]

7月13日(水)

今日の予定は、<Aパーティー>がガイド1名とモンタンヴェールからメール・ドウ・グラス(氷河)に下り、終日氷雪トレーニング。<Bパーティー>も同じくモンタンヴェールまで上り、氷河見物後、ドリユを眺めながらモッテ小屋経由でプラに下るハイキングコースをたどる。(実際、プラに行きそびれてシャモニまで歩いてしまう。モッテ小屋をおりた所で、フランス人に「プラどっち?」と聞いたつもりが、相手はシャモニのほうを指差し「こっち」てなことを言ったので、せっせと歩いていたらシャモニに着いてしまった...。らしい。)



モッテ小屋



メール・ドウ・グラス(雲の中はグランド・ジョラス)

<Aパーティー>4名は、組合事務所前でガイドと合流し8時30分に出発という予定のため、早目にホテルを出る。今日も爽やかな快晴である。教会前の広場でしばらく待つとガイドらしい長身の人物が現れる。黒い髪に黒い瞳、陽に焼けた顔の口下に特徴のある髭を蓄えた、どちらかといえば“ラテン系”風貌のイケメンである。(小嶋さんの目が♡♡) それぞれに挨拶と自己紹介を交わす。名前は「オクタビオ」と言う。

数分後、彼の名前が思い出せなくなって、小声でみんなに「何ていったっけ?」と聞かすが、誰も答えられない。みんな一様に年だけは喰ってしまい、記憶力の低下をハタと実感する瞬間であった。

シャモニ鉄道駅の線路を陸橋で渡り、裏手を行くとすぐにモンタンヴェールへ向かう登山電車の駅に着く。

ここで<Bパーティー>と合流。ガイドのオクタビオを紹介する。(前川奥さん、ダンナがいるのに目が♡♡)

駅前は結構混雑している。電車の座席は最前列を確保、ゆったりとしたスピードで発車する。緩やかな勾配をしばらく登ってゆくと、樹林の合間から“赤い針峰群”と呼ばれる岩山が見えてくる。(翌日、この岩稜を攀じることになる。)さらに電車はラックレールをきしませながら急勾配を登ってゆくと、30分ほどでモンタンヴェールの駅に到着。

ホームに降り駅前の展望広場に向かうと、いきなりあの“ドリユ西壁”が目の前にドーンと飛び込んできた。その圧倒的な存在感にしばらく釘付けになってしまう。

ここで<Bパーティー>と別れ、氷河に向けて出発する。緩やかな下りをトラヴァース気味に降りてゆく。15分も歩いたらどうか、氷河までは相当の距離のある登山道の脇で、オクタビオからハーネスを着けるよう指示される。以前ゴルナー氷河を下った時のように、岩場でもあるのかなとその時は思った。身支度をし、ヘルメットもつけて歩き始めると、すぐに道はなくなっていた。先を見るとザイルで結び合ったパーティーが、鉄梯子を下ろうとしているのが見える。近づいて覗いてみると、思わず「ここかよ!!」と、さまあーずのツッコミ(ちよっと古いが)を入れたくなるような光景がそこにあった。氷河に向って鋭く切れ落ちた50m以上はあると思われるような岩壁に、肩幅よりも狭い鉄梯子が延々とくり付けられている。

オクタビオが「ザイルなしでも大丈夫か?」と聞くので、「なしでも行けると思う...。」といかにも心細そうに

応えると、その微妙な心の揺れを察知したのか彼は、「じゃあザイルをつけよう。」とってくれた。(ホッ) 小倉を先頭に下りにかかる。下り始めて気がついたが、鉄梯子は途中のテラスで数ヶ所途切れていて、長いハシゴを3本、短いものを2本乗り継いで降りて行く。最初氷河上に見える登山者が米粒くらいだったのが、顔かたちが確認できるところまで降りてくると、緊張も和らいできた。

氷河にはトレーニング目的のクライマーが数パーティー降りていて、あわただしく準備を始めている。中には高校生くらいの<カワイイ>女の子もいるではないか。＼(^o^)/

今降りてきた岩壁を眺めながらクランポン(アイゼン)を装着する。氷河は程よく締まっていて歩行トレには最適のコンディションだ。オクタビオを先頭に上部に向かって出発する。氷河の地形を利用し、直登、トラヴァース、下降を繰り返しながら我々4人の力量をチェックしているようだ。50過ぎのオジサン、オバサンの割には、結構無難にこなしているものだから、オクタビオから「Super!!」「Excellent!!」の賞賛の声が飛ぶ。

「あたりめえよ!!」とは言わなかったが、ちょっと調子こいてしまい、小さな雪壁の前爪を使ってのトラヴァースで、ひょいひょいで行こうとしたら「ズリズリ」と滑ってしまう。オクタビオからすかさず「靴をもっと水平に」と指摘を受ける。なんか30年ぶりにこんな風に言われた気がして、ちょっぴり新鮮な気持ちになる。

さらに上部へクレバスを避けながら登下降訓練を続ける。ふと前方を見れば、グランドジョラスの垂直に切れ落ちた北壁を望むことが出来る。谷の右側を見上げればシャモニ針峰群が空を突き上げ、さらに左にはヴェルト針峰。なかなか贅沢なビューである。そんな氷河のど真ん中でランチタイム。昼食は出発前にオクタビオが準備してくれたもので、ボリュームのあるフランスパンのサンドウィッチやチョコレートなど食べきれないほどの量がある。昼食後前川さん、オクタビオと仲良くタバコを吸っている。

タップリの休憩の後、歩行トレをしながらの下山にかかる。途中、深く切れ落ちたクレバスを見つけると、みんなで競い合って大きな石を落とし、深い間から聞こえる落下の音を聞いては感嘆の声を上げる。

鉄ハシゴの取付地点に到着し、アイゼンを外して、岩壁の登りにかかる。下りの時よりも余裕はあるが、それでも一段一段慎重に登ってゆく。モンタンヴェールの駅は観光客でごった返しており、電車に乗るまでに長い行列を強いられる。ホームのベンチ電車を待っている時、オクタビオがふと「今晚、クライミングに行くんだけど、一緒に行かないか」と話しかけてきた。(そのとき自分ではそう言ったと思ったが、実は悲しいかな“My Poor English”。帰国後に山岳誌“ROCK & SNOW”知った事だが、オクタビオが誘った内容は、その晩シャモニで開催された「クライミング・ワールドカップ」を見に行こうということであった。)少し疲れもあって丁寧にお断りしてしまった。Oh My God !!

今日も夕食は、お馴染みさんになった「さつき」へ行く。



ガイドのオクタビオと

(左から小嶋、前川、小倉、オクタビオ)



ドリュ西壁

赤い針峰群[les Aiguilles Rouges]

7月14日(木)

<Aパーティー>の今日の予定は、当初モン・ブラン・デュ・タキュル(4, 248m)の登頂であったが、諸事情の為若干変更があり、メール・ドゥ・グラスの向こう側の山域でトレーニングということになった。はっきりした行き先がよく分からないままガイド組合に向かう。

<Bパーティー>はこの日、エギーユ・デュ・ミディ(3, 800m)に上がり、マッターホルンやモンテローザまでが望める程の快晴の中、360度の大展望を満喫したあと、さらにゴンドラに乗り、ヴァレ・ブランシュ(白い谷)の上を30分かけて、イタリアとの国境にあるエルブロンネ・ピーク(3, 462m)に向かい、イタリア側からのモン・ブランを眺める。さらにさらにロープウェイでイタリアのアルペン・リゾート、「クールマイユール」に下ってしまう。途中この町に滞在している日本人の婦人「水野さん」(アメリカで音楽の先生をしている)と知り合いになり、いろいろ話が弾んだようだ。ただこの町に下りたタイミングがちょっと悪く、昼休み時間帯(13時~15時半)に入っていたため、ほとんどのお店が“CLOSE”。唯一営業していたレストランでかろうじてランチにありついたそう。



イタリア側からのモン・ブラン



クールマイユール

<Aパーティー>4名は教会前の広場で、ストレッチなどして待っていると、我々のほうに若い男性が近づいてくる。今日から行動を共にするもう一人のガイドのようだ。名前は「ヤーニキ」。オクタビオより少し小柄だが、これまた甘いマスクの“ジャニーズ系”イケメンである。(小嶋さん、この先ど一なる...♡?)

すぐにオクタビオもやってきて、今日のランチを受け取り、彼らの自家用車に分乗する。小嶋、小倉はヤーニキの「LAV 4」、箕浦、前川はオクタビオの“ポンコツ車”(失礼)に乗る。この組み合わせがこれから先の行動パーティーとなる。車中でヤーニキから「あんたら夫婦か?」と聞かれる。小嶋さんあわてて「No, No, フレンド! フレンド!」と答えた後、「フレンドってのもおかしいかな? 山岳会の会員同志ってのはどういうんやろか?」と一人ブツブツ言っている。小倉が「わしのカミサン今日は、エギーユ・デュ・ミディに行っとりまして、彼女のダンナは日本でお留守番ですねん。」と言うと、彼は笑いながら納得していた。

車は15分ほどでプラ[les Praz]のロープウェイ乗り場に着く。ここでようやく今日のトレーニングの場所が解ってくる。ゴンドラでフレジュールに上がり、さらにリフトに乗り換えアンデックスまで登る。リフトの駅を出ると、目の前に屏風のように連なる岩峰が姿を現す。それは滝谷にも似た黒っぽい岩肌で、けっこう威圧的に迫ってくる。(赤い針峰群と呼ばれ、2, 800~900m級の岩稜が連なる。)

ラック・ブランへ向かう登山道を外れ、ガラ場を岩峰の方向に少し登ってゆくと、大きな岩棚の上にマーモットが寝そべっているのを発見。近づくとすぐに姿を隠してしまう。上部にはまだ雪渓が残っていて、ステップを切りながら高度を稼いでゆく。雪渓を抜けさらに足元の悪いガラ場を登り詰めると、岩峰の基部に達する。ここでハーネスとメットを着けザイルを結ぶ。ヤーニキ、小嶋、小倉に続きオクタビオ、前川、箕浦の順でコン

テにて出発。ルンゼ状の岩をズンズン登り詰めて行く。途中、賑やかなフランス人の年配パーティーとすれ違う。女性も一人いて、「わたしゃこんなとこ下ってくるとは想像もしなかったよ!! ホッ、ホッ、ホッ。」とでも言っているように聞こえたが、またワイワイガヤガヤと下っていった。

さらに登り詰め、稜線に達すると、反対側の足元には大きなカール状の景色が広がる。ここから右側に延びる岩稜ルートを行く。トップのヤーニキはスピーディーに駆け上がり、あっという間に見えなくなる。小嶋、小倉が後に続く。チムニー状の左壁にホールドを取り、岩の感触を楽しみながら攀じる。雰囲気的には前穂北尾根Ⅲ峰のような感じだが、岩は案外しっかりしている。小さなピークに達した後、さらに稜線通しにいくつかのピークのClimb Up、Downを繰り返す。しばらく行くと展望の良さそうな大きなピークに人影を確認、そちらに向かって攀じてゆく。ピークに達すると、入れ替わりに、先ほど見えたパーティーのクライマー達が下って行く。ここでランチタイム。岩角にビレーをとってお弁当を広げる。今日も大きなサンドウィッチが出てくるが、やはり食べきれない。くちばしの黄色いカラスに似た鳥が飛んで近づいてくるので、パンの切れ端を岩の上に置くと、サッとくわえて去ってゆく。鳴き声は「カー」ではなくて「ピー」だった。

ここからはるか下方にエメラルドグリーンなラック・ブランを望む事ができる。その湖に向かって下山を開始。岩稜帯を抜け、浮石の多い急勾配のガラ場を過ぎると雪溪の上部に着く。ここで小休止。あらためて振り返って、今日攀じてきたルートを確認する。

長い雪溪を下り、それ以上長いガラ場を歩き続けるとようやくラック・ブランに到着。湖の周りにはたくさんのハイカーが訪れている。その中にヤーニキの女性の友人がいたみたいで、あちら式の挨拶で「チュ、チュッ」とやっている。「あららら...」と思ったけれども、極力平静を装う。ほかに目を移すと、若いカップルが人目も気にせず「Hug, Hug」なんかごく自然にやっちゃってる。「うーむ、ここはまさしくフランスなのだ。」



岩稜を攀じる



ラック・ブラン湖畔(手前はミノさん)

湖畔を眺めながらしばらくここで休憩を取った後、アンデックスに向けて出発する。約一時間半の行程で、しっかりとした岩が敷かれた登山道を、モン・ブラン山群を左手に眺めながら進む。歩き出して30分程経った頃、箕浦さんの様子が少しおかしくなる。海外旅行では常に洗礼を受ける「オナカ」の調子が思わしくなくなったようだ。小刻みに休憩を入れながら、何とかアンデックスにたどり着く。

ここからは、今朝登ってきた同じルートで、フレジュール経由でプラに下る。駅に到着した後、ヤーニキから明日からの行動予定の説明を受ける。当初の予定では、明日から2日間はモン・ブラン登頂の日程で、最終日は予備日としていたが、登頂予定日の明後日の天候が思わしくないらしい。そのためモン・ブランへは出発を一日遅らせ、明日は高所トレーニングをかねて、エギーユ・デュ・ミディーのコスミック山稜を攀じるといふ。心の中で思わず「やったー!!」と叫んでしまう。今回はもちろんモン・ブラン登頂が目的ではあったが、シャモニに来たんだったら、あのガストン・レビュファが攀じたシャモニ針峰群に出来れば行ってみたい…。と秘かに思っていた。それが実現してしまう。ルンルン気分でホテルに向かう。ただ、ミノさんの「オナカ」はまだ改善の方向に向かっていなかった。前川さん持参のどっとおきの薬を飲んで、早朝出発の明日に備える。

エギーユ・デュ・ミディー(コスミック山稜)

7月15日(金)

<Bパーティー>は、スイスとの国境にある、お花畑が美しい「バルム山」のハイキングコースを歩く。黄色のお花畑が延々と続くなだらかで展望のよいコースで、マーモットにも会うことが出来た。

この約3時間のコースを歩いた後、ル・トゥールからバスでアルジェンチェールまで戻り、ロープウェイでグラン・モンテに上り、エギーユ・ヴェルテを間近に望める氷と岩の世界を満喫する。マルチパスを最大限有効に生かすとはいえ、3人は精力的に歩き回っている。



バルム山へ向かう黄色のお花畑の道



エギーユ・ヴェルテ(グラン・モンテより)

<Aパーティー>は、ロープウェイ駅前に6時30分集合のため、朝食は各自の部屋で適当に済ませ、早めにホテルを出る。街中の人通りはまだまばらだが、駅前にはかなりの人であふれていた。そのほとんどがザイルやヘルメットを身につけたクライマーで、始発のロープウェイを待っている。何故か日本人(アジア人)は我々だけのようだ。しばらく待つとオクタビオとヤーニキがやってくる。渡されたチケットを持ってゴンドラに乗り込む。シャモニの街があっという間に小さくなって行く。中間駅で乗り換え、傾斜の強い斜面をかなりのスピードでさらに昇ってゆく。そして3, 800mのエギーユ・デュ・ミディーの山頂駅に到着。気温は低く、すぐにオーバーヤッケを着込む。出発前のミノさんは体調がまだ不安気味であったが、ここまで昇ってくる頃にはかなり回復していた。駅の片隅でハーネス、メット、アイゼンを手早く身につけ、3人ずつザイルを結び合せて、登山者専用のゲートから表に出る。目の前にシャモニ針峰群の大パノラマが広がる。ただこれらの絶景よりも気になるのは、下降ルートのリッジ状になったトレース(北東稜)だ。しかし思ったよりも道幅は広い。

右側のヴァレ・ブランシュと左側のボソン氷河に切れ落ちている絶壁を眺めながら小倉先頭に慎重に下ってゆく。

北東稜を下りきり、ミディー針峰を右に見上げながら、傾斜のゆるいヴァレ・ブランシュを結構早いペースで進む。前方にモン・ブラン・デュ・タキュルがどっしりと構えており、数パーティーが取り付いているのが見える。尾根を巻き込むようにさらに進むと、上方にシモン小屋が見えてくる。しばらく登り詰めると小屋に到着。

小休止後、いよいよ、コスミック山陵に取り付く。ヤーニキ、小嶋、小倉パーティーが先に出発。前尾根のスケールを大きくした感じで、ところどころに雪が残る白い花崗岩にクランポンをきませながら、数ピッチ登って行くと、最初のピークに出る。ここから小倉先頭にクライムダウン。さらに稜線をたどり、小ピークのアップダウン繰り返して行く。時折足元に切れ落ちるヴァレ・ブランシュや後方のモン・ブランを眺めながら、ガストン・レビュファに思いをはせる。もったいないくらいの快晴。“ダンゴ3兄弟”のようなゴンドラが、広い雪原をイタリア側に向かって行くのが見える。



ヴァレ・ブランシュを行く“ダンゴ3兄弟”



クーロワールの下降(小倉)

高度を稼ぎながらしばらく登り、狭いテラスで小休止していると、オクタビオとヤーニキが、岩に打ち込まれたボルトにザイルをセットし始める。アプザイルンでもするのかと、その様子を見ていると、小嶋さんが呼ばれ、セットしたザイルの長さを調整し始める。そして一言二言説明して、ヤーニキの確保で小嶋さんが岩の向こう側に下降を開始する。こちらからはその様子が見えないのでどんな感じなのか分からないが、かなり苦労しているようだ。ヤーニキがしきりに「スイット！スイット！」と叫んでいる。「座れ？」と言っているのかなと思ったが、イマイチ理解できない。ようやく小嶋さんが下りきったようで、続いて小倉が下降を開始する。ホールドを探そうとするが、降り口がハング気味で体が空中に放り出された感じになり「ちょっとタンマ！」と言いたくなってしまう。ジタバタしているうち、すぐに気がつく。「そうか、座っていればいいんだ。」ザイルにぶら下がったまま、大きなクーロワール状を足でバランスをとりながら降りてゆく。小嶋さんが下からカメラを向けている。続いて前川さんが下降し始める。やはり降り口でジタバタやっているので、下から「そのままぶらさがっていればイイヨー！」と声をかけると、安心したようにスムーズに降りてくる。全員下降を終え、なおしばらく岩と雪の稜線を行くと、大きなテラスに出る。その先を見ると形のいいツルム状の岩壁に数パーティーが

取り付いているのが見える。最後尾のパーティーは順番待ちの休憩中らしく、我々もここで大休止。水分と行動食を補給し、先行パーティーを見物する。このルートの核心部らしく、思ったよりも手間取っているようだ。

そのうち最後尾パーティーも見えなくなり、我々も登攀開始。しよっぱなから固定されたロープアブミを利用してホールドのない垂直を行く。アブミの上段から岩に移るところがいやらしく、強引にへばり駆け上がる。

この上部はチムニー状の凹角があり、特に難しくはなく快適に岩の感触を楽しみながら登る。ピークを回り込み痩せた岩稜を下り気味に行くと、まもなく登攀終了点である山頂駅テラスの直下に着く。心地よい達成感が体中にあふれてくる。たくさんのギャラリーの注目の中、テラスまでの頼り気ない長い鉄ハンゴを登り、柵を乗り越してテラスに下りる。オクタビオとヤーニキから熱い祝福を受けた後、ザイルを解いてハーネスを外す。テラスにいた観光客にお願いして、全員の記念写真を撮ってもらう。

この後展望台に登り、あらためて360度の大自然を堪能して、下りのロープウェイに乗り込む。

観光客の多さにはちょっと閉口したが、今日の高所トレを兼ねたクライミングの満足感で、しばらく余韻に浸りながらゴンドラからのモン・ブランをながめていた。

ホテルに着いたのがまだ2時過ぎで、時間の余裕もあったので、ミノさんと小倉夫婦で街をぶらつく。今日の夕食は、各自日本から持参した食料で自炊ということになった。我々はミノさんの部屋にて街で買った惣菜と持参の「赤飯」「赤いきつね」の小宴会を催す。調理はベランダでEPIを使う。(こっそりと)

いよいよ明日からモン・ブランである。やや下り気味の天候が気になるが、装備の点検を念入りに行い、胸の高鳴りを抑えながら、いつもより早めに就寝。



コスミック山稜核心部の先行パーティー



ミディ針峰山頂駅テラスにて

(左から箕浦、オクタビオ、前川、小嶋、小倉、ヤーニキ)

モン・ブランへ

7月16日(土)

まだホテルのスタッフも見当たらない早朝、部屋で軽い朝食を済ませ、1階のロビーに下りる。窓の外は小雨がパラついている。見送りの奥さんたちも降りてきて、不安げに灰色の空を見上げていると、迎えのヤーニキがやってくる。初対面の奥さんを紹介する。ヤーニキは「この雨はすぐに上がる。天候は回復に向かっているから大丈夫。」といった。その言葉が自分たちの重苦しかった気持ちをパーア♡と明るくさせてくれた。奥さんたちの見送りの中、ホテルの近くに止めてあったオクタビオの車に4人乗り込む。ヤーニキは遅れて我々を追いかけるようだ。

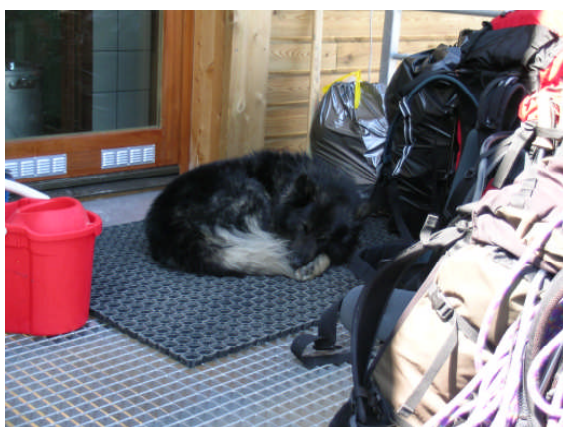
<Bパーティー>はこの日、バスでレ・シャヴァン[les Chavants]に向かい、ここからテレキャビンでル・プラリオン[le Prarion]に上る。シャモニの谷の西側に位置し、日本人ハイカーもあまり訪れることはなく、展望のよい静かなハイキングコースである。

帰り道、バス停の近くにあったお店でトイレを借りたとき、鏡の高さがあちらの人のサイズに合わせてあるため、自分の姿がまともに映らなかったのが笑えた...。らしい。

<Aパーティー>の車は、15分ほどでレ・ズーシュ[les Houches]のロープウェイ駅に着く。

オクタビオと我々4人でゴンドラに乗り込む。モン・ブランを目指す登山者やビオナツセイ氷河[Glacier de Bionnassay]見物の観光客でかなり混み合っている。10分弱でベルヴュー[Bellevue]山頂駅に着く。花の咲き乱れる牧場のような高原の道を下ってゆくと、小さな登山電車の駅がある。しばらく待つとサン・ジェルベから登ってきた電車が到着、早速乗り込む。アプト式の電車で、急斜面を登るレールに合わせて床がかなり傾いているのでコケそうになる。天候の回復し始めた車窓の景色を楽しんでいるうち、20分ほどで終点のニ・デーグル[Le NiddAigle]駅に着く。

靴ひもを締め直し、いよいよ出発。整備された登山道から左に折れ、ジグザグの道を行く。そんなに速いペースではないが結構キツイ。左手の無人小屋を見ながらさらにガレ場状の道を進むと、道はやや平坦になってくる。しかしすぐに傾斜のある岩場の道が上に続く。ここを登りきったところで休憩を取る。目の前には大きな雪渓が広がっている。テート・ルースの小屋(3,167m)まではもう一息だ。雪渓を右にトラヴァースし、緩い斜面をしばらく行くと小屋に到着。オープンテラスでのんびりとランチタイムをとることにする。そのうち後発のヤーニキも上がってきた。ガイド2人は小屋の中でコーヒーを飲み始める。我々は日向ぼっこしながら少しウトウトする。小屋の入口には黒いでっかい犬が昼寝をしている。ヨーゼフのように愛想は良くなくおとなしい。(ひたすら寝ている)



テート・ルース小屋の犬



ヤーニキ(左)とオクタビオ

オクタビオからハーネスとメットを着けるよう指示されて出発の準備にかかる。行く手には、急峻なためほとんど雪の付いていない、黒い壁のような山が立ちはだかっている。その頂上付近にグーテ小屋らしきものが見える。いつものパーティーでアンザイレンして出発する。雪渓を登りつめ、岩稜の下部をトラヴァース気味に行くと階段状になった岩場になる。ここを越してゆくと、いよいよ落石の巣「グラン・クロワール」のトラヴァース地点に着く。落石の音に耳を研ぎ澄ませながら、不安定なルートを足早にかつ慎重に行く。駆け足のよなスピードで息が切れそうになる。ここを通過すると後はひたすら上へ上へとダイレクトに登ってゆく。小屋に近づくとつれ傾斜はどんどん強くなっていく。所々に鉄のハンゴやステップが取り付けられているので不安はないが、体力的にかなりシンドイ。小嶋さんのペースも少し落ち始め、動きが止まることも多くなる。先行する箕浦、前川パーティーから少しずつ遅れてくる。それでも何とか気力で登りつめ、先行パーティーより20分ほど遅れてグーテ小屋に到着。前川さんが手を振って出迎えてくれる。

小屋の中は登山客でごった返しており、装備専用の部屋に、ピッケル、メットを置いた後、宿泊用の小屋に案内される。ロフト形式で通路を挟んで合い向かいに2段になった寝床(?)がある。我々の寝るスペースはすでに確保されていた。4時の夕食までにまだ間があるので、昼寝をすることに。しかし登山客もどんどん到着し、賑やかになってきて騒がしくなる。ここも日本人は我々だけのようで、しかも女性は小嶋さん以外見当たらない。高度のせい(3,817m)頭が少し重く感じる。



グーテ小屋目指して岩稜の登行(小休止)

(小嶋さん[手前]と小倉)



グーテ小屋の宿泊棟

(左から小倉、前川、小嶋)

夕食の時間が来て食堂に行くと、一番奥の角にすでに確保されたテーブルがありオクタビオとヤーニキが待っていた。この小屋を利用する場合、ガイドとセットの予約だと、何かと優先的に事が進み非常に助かる。夕食のメニューは、コンソメ風のスープ、青黒いカビに覆われたチーズ、肉料理が出てくる。デザートもある。でもスープが一番旨かった。カビのチーズはそのまま食べるものと思っていたが、オクタビオ、ヤーニキがナイフでバサッ、バサッとカビを剥ぎ取り、中身だけを食べている。それを見て安心して手をつける。結構ショッパイ。隣の英語を話す登山客(English or American?)のグループはおかわりもしてバクバク食べている。基本的に欧米人と日本人の胃袋に入る量は格段の差がある。

固形物はそんなに多くのを通らないが、高山病対策のためにも水分は出来るだけたくさん取っておく。食事後、オクタビオから明日の行動の説明を受ける。大体は理解できたが、ただひとつ「メテオ」がなんたらかんたら言っているのがよく理解できない。首をかしげているとオクタビオが私を食堂の中にあるパネルの前につれて行き、説明し始める。「メテオ」とはフランス語[Meteo]で「天気予報」の事らしく、パネルに書かれてある明日の予報の内容を説明してくれる。「標高 4,000m 付近は気温マイナス 20°C 近くまで下がり、風が相

当強く吹き荒れるという。天候は崩れることはないが、登攀には厳しい状況が予想される。」大体このような内容であった。そして最後に、「明日は予定通り3時に小屋を出発するが、上の状況によっては引き返す場合もある。」と付け加えた。テーブルに戻り、今聞いた内容を3人に話す。小嶋さんは「お任せします。」と答え、箕浦、前川両氏もそれにうなずいた。

宿泊小屋に戻る途中、携帯電話で奥さんと連絡を取る。夕方シャモニから見上げたモン・ブランは、雲にスッポリ覆われていてほとんど見えなかったようだ。

薄暗い小屋の中で装備の点検を済ませ、毛布の中に潜り込む。まだ頭が少し締め付けられる感じがする。バッファリンを2錠飲む。

頂上へ

7月17日(日)

暗闇の中が少しざわつきだし、腕時計をヘッドランプで照らすと、まだ2時前。眠ったのかどうかよくわからない。隣の前川さんと箕浦さんの、心地よい寝息が聞こえる。2時になるのを待って起き上がると、他の3人も起き出しゴソゴソと準備をはじめ。やはりまだ頭が少し重い。朝食を取るために食堂へ向かう。パンをほおばりジュースで流し込む。外はまだ真っ暗で、天気が良いのか悪いのか分からない。朝食後トイレに行くが、便器の位置が異常に高く、ちょっとのぞくと氷河の冷気がヒューと上がってくる。(天然ボットンだ！)

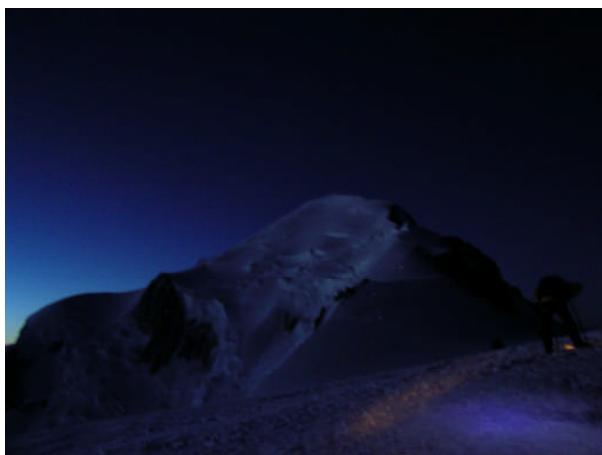
準備を整えて小屋の表に出る。ここから上部は雪の上の登行のため、ヘルメットは使用せずウールの帽子をかぶる。暗闇の中ヘッドランプの明かりでアイゼンを付け、ザイルを結んでいよいよ頂上への登行が始まる。

雪が締まっていて、アイゼンが小気味良い音を立てる。気温が低いためウールの手袋の中の指が痛い。足元のランプの明かりを頼りに、ひたすら先頭に行くヤーニキのペースに遅れまいと必死こいて歩く。景色もまだ闇の中で、はるか上方に行く登山者のヘッドランプの光だけが連なって見える。ほとんどのランプが発光ダイオードの白色光なので、前川さんのフィラメントの赤い光が暖かく感じられる。

単調な登りを1時間半ほど歩くと、やがて闇の中から山々の姿が浮かび上がってくる。そしてはるか上方にモン・ブランが神々しい姿を現す。快晴である。陽の光が左手から我々を徐々に照らし始める。

高度の影響はさほど感じられないが、単調な登行はまだ延々と続き、足も徐々に重くなってくる。最初のピーク、ドーム・デュ・グーテ(4,304m)を越え、コル・デュ・ドームに着く。ここで小休止。

もうすでに未知の高度に達していた。(過去の最高到達点はブライトホルン<4,164m>)



暗闇の中から姿を現し始めたモン・ブラン



頂上目指す登行が続く

チョコレートをはおぼり、ウィンダー・イン・ゼリー(日本から持参)を胃に流し込む。小嶋さんがチョット疲れ気味の様子。先はまだ長い。

オクタビオ、箕浦、前川パーティーが先に出発する。ここから斜面が少し急になってきて、息があがり始める。足も徐々に重くなり、果てしなく上方へと続くトレースを見上げるのが気分的に辛くなってくる。この急斜面を登りきると、左手の小高い岩の上にヴァロの避難小屋が見えてきた。このあたりは傾斜も緩く稜線も広がっていて、スキー場のゲレンデのようだ。しかしすぐにルートは狭くなり、再び傾斜も強くなってくる。

体全体が重くなる。本能だけで足が登行のステップを切っている感じがする。ただ自分以上に前を歩く小嶋さんの動きが、相当の疲労を感じさせる状態になっていた。ヤーニキもペースを落とし気味に歩いてくれるが、足が止まってしまうことも多くなってきた。グランド・ボス(大きなコブ)、プチ・ボス(小さなコブ)を左右に見ながら通過するが、実際じっくり眺めている余裕なんてほとんどなかった。ルートはさらに狭くなり、下から見上げたモン・ブランの丸くてなだらかな稜線からは想像できないくらい、両側が切れ始めた。そして右手にラ・トゥルネットの岩場が見えてくるころ、周りの視界が急に悪くなり、強烈な風が吹き出した。風に吹き飛ばされた硬い雪の粒が容赦なく顔を叩きつけ、まともに目を開けていられなくなる。悪天の冬富士を歩いているようだ。しかしまだトレースは上へと伸びている。風でよろけそうになりながらしばらく進むと、上方からオクタビオ、箕浦、前川パーティーが降りてくるのが見えた。登頂を無事終えて、下山してきたらしい。前川さんの顔が、風雪に叩きつけられて悲惨な状態になっている。ミノさんのカメラが寒さで凍り付いて、頂上ではシャッターが切れなかったらしい。「もう一息で頂上だよ。」という言葉の励みに、再び歩き出す。しかし「もう一息」とは裏腹に、視界の悪いトレースはなかなか終わりを告げようとはしてくれない。ただ足元だけを見つめながらひたすら重い足を持ち上げる。そして足元の傾斜がなんとなく緩くなってきたのに気がつく。何かの目印か、小さな旗のようなものが、雪の上に数本立てられている。「頂上や...」



小嶋さんとヤーニキ



Top of Mont-Blanc(4,807m)

小倉

先頭のヤーニキが振り返り、にっこり微笑む。小嶋さんふらつく足でヤーニキに駆け寄り、“熱い抱擁”そしてその場に座り込んでしまう。小倉も発する言葉が見つからず、ヤーニキに抱きつきながら、思わず目頭を熱くしてしまう。そして頂上はいくらか風も弱まり、いつの間にか視界がすっかりと開けてきて、眼下には雲の上に顔を出したなアルプスの高峰が大きく広がっていた。

ひとつ大きな深呼吸をし、小刻みに震える足元の旗を見ながら、日本を発つ2週間ほど前、定光寺の岩場の事故で帰らぬ人となった「高橋さん」、そしていつか一緒にモン・ブランに行こうと約束したが、やはり帰らぬ人となってしまった「村瀬実氏」に登頂の報告をする。

オーバーヤツケのポケットからカメラを取り出し、急いで小嶋さんとヤーニキのツーショットを撮り、自分も撮ってもらう。(この時、立っていた位置が逆光であったため、小倉はシルエットと化していた。)

10分も頂上に居ただろうか、すぐに下山を開始する。数組のパーティーが登ってくるが、ほとんどのパーティーは登頂を終え下山中のようだ。最初の降り口は慎重に行くが、後はアイゼンを効かせて、急斜面も時折ショートカットしながら快適に行く。太陽が高くなってきて、雪に反射した光が顔をじりじりと照りつける。雪も少し腐り出しトレースのない斜面を歩いていると、ふくらはぎまで足が埋まってしまう。登ってきたときには眺める余裕もなかった周りの景色を楽しむことができたが、ちょっとした登り返しがあると、スピードがガクッと落ちてしまう。グーテ小屋までの距離がこんなに長いとは...いまさらながらモン・ブランの山の大きさを再認識してしまう。2時間ほどかけてようやく小屋にたどり着く。3人が出迎えてくれる。オクタビオともガッチリ握手。まわりの登山者からも祝福を受ける。まだ先はあるが、「終わったー」という安堵感が体を駆ける。アイゼンを外し、ベンチに腰掛けて長い休憩を取る。先行の3人はもう準備を整え下山を開始し始めた。30分程して、我々もアンザイレンして下山にかかる。長い岩稜帯をかなりいいペースで下り、「グラン・クロワール」も危なげなく通過する。テート・ルースの小屋には寄らず、腐りかけて歩きにくい雪渓をそのまま下ってゆく。雪渓が途切れ、ガレ場を少し下ったところで小休止。気温も上がり目を閉じると眠くなってくる。前からちょっと気になっていたのも、ヤーニキに「結婚しているの?」と聞くと、「していない」と答える。「じゃあ、ガールフレンドはたくさんいるのか?」と言うと、テレながら「たくさんはいない、一人だけいる」と答えてくれた。「Beauty?」と言うと、自信ありげに「もちろん」(たぶんそう言っていると思う)と笑顔で答える。

レ・ズーシュの駅に近づくころ、岩場のあちこちに、登ってくるときには見る事のなかった「ブクタン」と呼ばれるカモシカのような動物が姿を現しだした。(大きな角のダンナのお友達だー♡)近づいても逃げようがないので、急いでカメラに収める。



中央のピーク付近にグーテ小屋が見える



ブクタン(ちょっとにらまれた)

電車の駅は、登山者以上に観光客であふれかえっていた。電車も予約券が必要で、次発の電車しか乗れないようだ。時間もタップリあるので、広場の隅で横になる。小嶋さんが売店でコーラを買ってきてくれて、久しぶりの味でのどを潤す。コーラを飲みながら小嶋さんがポツリポツリと語り始めた。数年前の大杉谷での事故の後遺症で身体的に登山活動が以前よりキツくなってきたことや、現在の「峠の会」の運営上の問題

点や悩みなど、普段あまり聞くことのない話に耳を傾ける。(そこにはか弱くけなげな少女(?)のような小嶋さんがいた...。)

ギューギュー詰め^の電車とゴンドラを乗り継いでレ・ズーシュに降り、ヤーニキの車でホテルに向かう。車の中で「いつ日本に帰るのか」と聞かれたので、「明日」と答えると目を丸くして驚いていた。答えながら自分でも「ああ、もう明日帰るのか...。」と思わずしんみりしてしまった。

ホテルの前でヤーニキと別れのあいさつをする。そして「彼女とお茶でも」と言ってささやかなチップを手渡すと、うれしそうに微笑んだ。そして車が見えなくなるまでしばらく見送っていた。Au revoir. ヤーニキ!

部屋に入ると奥さんもすでにハイキングから戻っていた。今日は午前中、シャモニの朝市で買い物をした後、我々が先程降りてきたレ・ズーシュへ氷河見物に行ってきたらしい。朝市では、息子の穂高から頼まれていたフレンチのレシピ本が安く手に入ったと言って喜んでた。

シャモニ最後の晩餐は、ミノさんの部屋で大宴会でなことになり、奥さんと二人で「さつき」で予約しておいたテイクアウトの「おにぎり」と「冷奴」をとりに行く。途中登山用具店に入り、グリベルのメタルアックス(45cm)を買ってしまう。(今回持参したものは“ウッド”のグリベルで、オクタビオから「いいもの持ってる」とほめられた。)

登頂成功の大宴会は、地元の惣菜や手作りサラダも加わって結構豪華なものになった。モン・ブラン組は疲れが残っているせいか、チョッピリのビールですぐに目がウツロになり出した。

帰国

7月18日(月)

タクシーは11時に予約を入れてあるので、それまでの間、エギーユ・デュ・ミディー駅前のショップへみんな^で買い物に出かける。前川さんもこの時、小倉推薦の“グリベル”を購入する。

11時に予約のタクシーでジュネーブへ。ホテルと契約しているこのタクシーは8人乗りワンボックスで、別に荷台も連結しており、料金も格安であった。

15時00分、BA731にてジュネーブを発ちロンドン(ヒースロー)へ、15時50分着。

迷うことなくキャセイパシフィックの搭乗ターミナルにたどり着く。

18時25分、CX250にて香港への再び長い長い空のたび。ヘッドホーンで久しぶりに日本の音楽を聞く。そして何気なく見ていた“嵐”が主演の映画にハマってしまい、寝るつもりが最後まで見てしまった。

7月19日(火)

13時20分、香港着。各自自由行動で広いターミナルを精力的に歩き回る。免税店でバランタイン21年とカミュXOを仕入れる。

16時10分、香港発。台北経由で名古屋(セントレア)へ。

21時05分、無事着陸。夜のセントレアもなかなかのものである。遅いせいか昼間とは打って変わってガランとしている。

さて今度行けるのはいつの日か。(5年後は58歳?)電車の中でいろいろ思いをめぐらせながら帰途に着く。